

他力たりにきとは 如来にょらいの本願力ほんがんりきなり 親鸞

いまでも、自分は努力しないで、他人の努力の結果を横取りする「あなたまかせ」という横着な甘い考えを、「他力本願りきほんがんでトクする」と言ってる人がいます。

それは、浅薄せんぱくな教養からする間違つた言葉づかいです。

残念ざんねんなことですが日本の多くの人は、神さま仏さまを、

「おめぐみ」に感謝する対象というより、「欲望」をかなえて下さる対象と思っているようです。

その証拠に、入学試験のころは、すぐれた学識教養の持主といわれた菅原道真すがわらのみちざねを祀まつつた天神社に、合格させて下さいと、多くの受験生がおまいりに行きます。

十日戎には、今年も儲けさせてくださいと、戎神社に、たくさんの方がおまいりします。

そのような思い込みの心で、さきの「他力本願でトクした」という間違つた言い方がされるのでしよう。

真宗では、「他力本願たりにきほんがんという言葉は、とても深い意味のある極めて大切な言葉なのです。

真宗の御開山ごかいざん、親鸞聖人しんらんしょうにんは仰せになりました。

『他力たりにきとは、如来にょらいの本願力ほんがんりきなり』と。

他力とは、他人の努力とか神仏のお助けではなく、如来様の本願力だと言われるのです。

では、まず『如来』という言葉をしらべると、如来にょらいは仏さまのことで別号べつごう・通号つうごうだと言われます。そして『如』から「来生らいじょう」された、『如』からおいでくださったから。

『如来さま』と言うのです。

そこで『如』とは何でしょうか。

私たちは今、生きています。自分の力で生きています。私たちが今、生きています。自分の力で生きています。仕事を精出せいだし、お金を儲け、健康や美容に気を配くばって生活くわくわいしていると思つています。

生活とはふつう、衣いと食じよくと住じゆうだと言われます。

衣いについて、よく考えてみると、肌着一枚、お金で買ったというけれど、大自然の恵みと多くの人手のおかげで製品となったものです。無数のおかげで寒い冬を生きています。衣いについて、よく考えてみると、肌着一枚、お金で買ったというより、生かされているのです。

「食」も同じことです。大自然から多くのいのちを頂き、多くの人々の御苦勞で、この口に預けています。

「住」も同じこと。天地自然のお恵みめぐみと無数の御苦勞を頂いて出来たこの住まいに、身を安らわせて頂いているので